

# 前田河広一郎と「日米時報」

浦西和彦

「三等船客」(「中外」大正10年8月1日)等を發表し、プロレタリア文学運動の先駆者として高く評価されている前田河広一郎は、

「先生」の徳富蘆花に「あなたも、ひとつアメリカへ行ってみませんか? 遊びにです。遊びは学問です。四五年、外国で遊んで来るんですな」(遺稿『青春の自画像―遊びは学問なり』昭和33年5月、理論社)と勧められて渡米した。前田河広一郎は、明治四十年五月二十二日に、シアトルに上陸し、大正九年二月に帰国するまで、十三年間をアメリカのシカゴとニューヨークで過ごす。

前田河広一郎は、ジャップなどの人種的偏見と差別の激しいアメリカ社会で、市民権もおろか、労働組合にも入れなく、生活にも、労働にも、なんらの保証もない異国で、ハウスワーク、茶、コーヒーや肖像画の外交販売などさまざまな労働で糧を得ながら、文字通り

地を這うような生活を続けた。これらの体験は、のちに短篇集『赤い馬車』(大正12年4月18日、自然社)や長篇『大暴風雨時代』(大正13年10月15日、新詩壇社)などに描かれる。

前田河広一郎は、プロレタリア作家として、日本の文壇に登場する以前に、このアメリカ滞在中に、英文による短篇小説を書いていく。「幸徳事件をねたにして、あまり知りもせぬ刑吏を扱った」「私のアメリカでの処女作」であると『青春の自画像―遊びは学問なり』で述べるところの「The Hangman」(絞刑吏)が大正元年十一月十六日「THE COMING NATION」に掲載された。前田河広一郎は、アメリカに在住している時に、「プログレッシブ・ウーマン」「カミング・ネーション」「インターナショナル」等に数篇の短篇小説を英文で書いて発表した。しかし、「ヨシワラ」や「ゲイシャール」など、日本の特殊な世界をエキゾチックな興味から書くことを要求するアメリカのジャーナル界に、前田河広一郎は

嫌悪を感じ、英文で小説を書き続けることを断念する。そして、大正六年夏には、久家一象、阿部幹三、石垣栄太郎らと雑誌「共存」を発行した。「共存」に短篇小説「暮の皮」を載せ、アメリカにおいて日本語で小説を書いていくことを志向する。

前田河広一郎は、一年間働いて、日本へ帰国するための旅費を支弁してもらおうという条件で、大正七年十二月六日から、日本語新聞「日米週報」の編集に携わった。日米週報社の小森丈輔に紙面刷新を任されたのである。「日米週報」は、星製菓の創業者であり、作家の星新一の父である星一が明治三十三年十二月八日に創刊した日本語新聞である。前田河広一郎は、この「日米週報」の編集長に就任する前に、すでに次の四篇を「日米週報」に寄稿していた。

- ①「山下西舟を送る」(「日米週報」大正7年6月29日、第885号)
- ②「武装」(「日米週報」大正7年8月24日、第893号)
- ③「紐育を嗅ぐの記」(「日米週報」大正7年8月31日、第894号)
- ④「発奮」(「日米週報」大正7年9月14日、第896号)

「日米週報」は、前田河広一郎が編集長になってから直ぐに、すなわち、大正八年新年号(大正7年12月28日、第911号)から、新聞の名称を「日米時報」と改称する。

前田河広一郎についての研究は、主に外国文学研究者によって、アメリカ時代の創作活動の調査がなされ、最近では、中田幸子著

『前田河広一郎における「アメリカ」』(平成12年10月20日、国書刊行会)が出版された。しかし、前田河広一郎の「日米時報」時代の活動については、中田幸子が「国立国会図書館などにあるマイクロフィルムでは、『日米時報』大正八年分は欠損しており、東大明治雑誌新聞文庫で閲覧できる原紙は二十三週分のみである」と記していることもあって、片山潜との交流など、その全容がほとんど明らかにはされていない。いまから二十四年ほど前に、アメリカの図書館で「日米時報」の大正八年の一年分をマイクロフィルムで入手した。この「日米時報」大正八年六月二十一日、二十八日に、中條(宮本)百合子が短篇小説「津軽の虫の巢」を載せていることは、拙文「百合子と『日米時報』のことなど」(『日本プロレタリア文学の研究』昭和60年5月15日、桜楓社)で紹介したことがあるが、ここでは前田河広一郎と「日米時報」について、若干報告しておきたい。

## 二

前田河広一郎が大正七年十二月に日米週報社に勤務した当時、どういう人々がそこに働いていたのであろうか。さきの「日米時報」大正八年新年号(大正7年12月28日、第911号)に、「恭賀新年／日米週報社」として、日米週報社の関係者の名前が列記されている。それによると、「社員」として、小森丈助、安井閑治、丘辺香

油谷英二郎、前田河広一郎、島川勉（在日本）、牧野栄三郎の七名の名前が記されている。また、「社友」として、原田実三（シカゴ）、神子嶋梧郎（在仏国）、野崎真、佐藤健、境野恵佐、宇野海作、西村亀太郎、久家一象、星一（在東京）、安楽栄次、中原斗一、原田棟一郎、茅原華山、石川半山（在仏国）、西川国三郎（在桑港）、西富祐吉、山下直次（在東京）の十七名の名前があがっている。社友として、茅原華山や石川半山らの名前が見えるのは興味深い。前田河広一郎の『青春の自画像―遊びは学問なり―』によると、丘辺香は活版部、油谷英二郎は広告部と雑報記者を兼ねていたという。しかし、日米時報社の「社員」には出入りがあったようだ。前田河広一郎は、これより一年後、帰国する直前、王郎剣の筆名で、「時報社七人伝」（『日米時報』大正9年1月1日、第963号）を執筆し、日米時報社の社員たちを、次のように寸描している。長い引用になるが、その全文をあげておく。それには、さきの「社員」七名のうち、小森丈輔と丘辺香の二名以外の人々については、その名前が出てこない。

◎小森丈輔 列伝十五章に載るべき好男子、紐育の孟嘗君、敢て男を売るに非ず、男を買ふを識る。時報社主の貫目は十二分にあり。活淡寔慾、主義の骨あり俠氣の肉あり。媚を粥かず安価な売文の徒とならず、鼻端の黒班は馬良五兄弟の白眉に倣ふ

が為め乎。風丰黒龍会幕僚の観はあれど酒々一笑すれば拳の様な梅の古木に花も咲くなり香も匂ふなり◎丘辺香 此人不幸にしてオリムパスに産れず激越なる現代産業界に朴々として自ら謳歌す、蓋し悲に堪えざるものあり、性温篤加之も同情に富み稍もすれば後輩の犯す処となる。時報社に於て古文典に暁通する者彼を推さずむばあらず◎宮武繁 外骨の甥だけあつて奇骨稜々、稲門の出だけあつて直言直行、朝顔に我は飯喰ふ男哉と詠むだ俳人を模してか彩筆好く風流を描いて深く染まず、切れ味のよい処ろが長短所、腸は奇麗なもの也◎照井栄三 彼れ長足蟻螂に似て良く歩み、良く喰らい、良く歌ふ。嘗て徒歩米國横断をなし、飯十三杯を平らげ、其詩英を咀み華を嚼む。さらりと青竹の思ふまゝに延びたるが如く真に自然児也◎森次郎 俠骨闊達慷慨悲憤の快男児、文を遣るや墨芳ばしく筆躍り気品凜乎として人を刺す。氣鋭活動良く義を知り名を重んず、些か古武士の典型に落ちんの恨あれども其の意氣以て愛すべし◎高山潔 談論風厲の土夙に苦業多年学殖蘊蓄無しとせず黙々として時報階上一卓を構ふるも時に大呼叱声禁酒の米國を罵る我意を得たり◎原田斬馬 急激なる現代の推移と共に本紙内閣解散の頻々たるありと雖斬馬生のシカゴ通信は百年一日の如く継続す。真に太陽系圏内の雄星。シカゴ日会幹事也◎王郎剣 自ら

赫顔を彩るは出来ぬ相談、孰れ其裡に自叙伝でも書く事あるべし。彼禁酒の米国を去らんとするも如上傍々の多士を残す、又顧慮するに足らず。慈に社内同人が粗画を描いて写真版代りに履端の礼となす。

大正八年の前田河広一郎は、「日米時報」の編集に精励した。『青春の自画像―遊びは学問なり―』によると、「主な割振りを終つて、せつせと記事を書き続けてみると、私の毎日執筆する分は、優に十六七枚になっていた。もっとも、一枚の原稿用紙は四百字ではなくて、二百七十字ぐらゐに當っていた。ともかくも、それが毎日である。日曜日も休日もなく、暇さえあれば、記事を拵えることで忙しいのである。わずかに、何も書かない日と云つては、締切日の金曜日だけであつた」と回想している。では、前田河広一郎が「日米週報」「日米時報」の編集長になつてどのような著作を執筆していたのか。「日米時報」には、前田河広一郎が執筆した無署名記事も多々あるものと推定されるが、それは省き、前田河広一郎あるいは広一郎と署名のある著作をあげると、次の通りである。なお、『青春の自画像―遊びは学問なり―』で『鉛刀一割』欄は、かくいう私が王郎剣という名で書いた」というので、王郎剣は前田河広一郎の「日米時報」における匿名であることが明白なので、それも一緒にあげておく。

「動中静観」〔日米週報〕大正7年12月21日、第910号、1面

\*署名・王郎剣

「一象と月指」〔日米週報〕大正7年12月21日、第910号、7面

「沢の談」〔日米時報〕大正8年1月1日、第911号、15面

\*小説

「動中静観」〔日米時報〕大正8年1月18日、第914号、1面

\*署名・王郎剣

「烈火―須磨子の死―」〔日米時報〕大正8年1月18日、第914号、5面

14号、5面

「動中静観」〔日米時報〕大正8年1月25日、第915号、1面

\*署名・王郎剣

「動中静観」〔日米時報〕大正8年2月1日、第916号、1面

\*署名・王郎剣

「イワンは如何する」〔日米時報〕大正8年2月1日、第916号、6面

6面

「ぼるこにいノ印象」〔日米時報〕大正8年2月1日、第916号、8面

\*署名・広一郎

「動中静観」〔日米時報〕大正8年2月8日、第917号、1面

\*署名・王郎剣

「犬」〔日米時報〕大正8年2月8日、第917号、6面

「動中静観」〔日米時報〕大正8年2月15日、第918号、1面

\*署名・王郎劍

「二刀兩断―人種排斥問題―」〔日米時報〕大正8年2月22日、第

919号、1面）\*署名・王郎劍

「合評デュボン乃能」〔日米時報〕大正8年2月22日、第919号、

8面）\*署名・広一郎・杏の連名

「二刀兩断」〔日米時報〕大正8年3月1日、第920号、1面）

\*署名・王郎劍

「指輪の為に（1）〜（39）」〔日米時報〕大正8年3月1日、

11月29日、第920〜959号）\*連載小説

「二人」〔日米時報〕大正8年3月1日、第920号、9面）\*植

松貞夫・前田河広一郎の連名

「鉛刀一割」〔日米時報〕大正8年3月8日、第921号、1面）

\*署名・王郎劍

「鉛刀一割」〔日米時報〕大正8年3月15日、第922号、1面）

\*署名・王郎劍

「鉛刀一割」〔日米時報〕大正8年3月29日、第924号、1面）

\*署名・王郎劍

「鉛刀一割」〔日米時報〕大正8年4月5日、第925号、1面）

\*署名・王郎劍

「鉛刀一割」〔日米時報〕大正8年4月12日、第926号、1面）

\*署名・王郎劍

「鉛刀一割」〔日米時報〕大正8年4月19日、第927号、1面）

\*署名・王郎劍

「尾崎氏政論の終点は奈辺なる乎」〔日米時報〕大正8年4月26

日、第928号、1面）\*署名・王郎劍

「鉛刀一割」〔日米時報〕大正8年4月26日、第928号、1面）

\*署名・王郎劍

「鉛刀一割」〔日米時報〕大正8年5月3日、第929号、1面）

\*署名・王郎劍

「鉛刀一割」〔日米時報〕大正8年5月10日、第930号、1面）

\*署名・王郎劍

「後藤男の微笑」〔日米時報〕大正8年5月10日、第930号、8

面）\*署名・王郎劍

「共存社社の可否」〔日米時報〕大正8年5月10日、第930号、

11面）\*署名・広一郎

「鉛刀一割」〔日米時報〕大正8年5月17日、第931号、1面）

\*署名・王郎劍

「十五日間」〔日米時報〕大正8年5月17日、第931号、8面）

\*署名・王郎劍

「鉛刀一割」(「日米時報」大正8年5月24日、第932号、1面)

\*署名・王郎劍

「鉛刀一割」(「日米時報」大正8年5月31日、第933号、1面)

\*署名・王郎劍

「濠洲代議士汽車に遅れざるの記」(「日米時報」大正8年5月31日、第933号、6面) \*署名・王郎劍

「鉛刀一割」改造の世界へ―(「日米時報」大正8年6月7日、第934号、1面) \*署名・王郎劍

「鉛刀一割」(「日米時報」大正8年6月21日、第936号、1面)

\*署名・王郎劍

「『斬奸状』―排日議員フイランへ与ふるの書―」(「日米時報」大正8年6月28日、第937号、1面) \*署名・王郎劍

「鉛刀一割」(「日米時報」大正8年6月28日、第937号、1面)

\*署名・王郎劍

「兩頭の黄龍」(「日米時報」大正8年7月5日、第938号、1面)

\*署名・王郎劍

「鉛刀一割」(「日米時報」大正8年7月5日、第938号、1面)

\*署名・王郎劍

「鉛刀一割」(「日米時報」大正8年7月12日、第939号、1面)

\*署名・王郎劍

「暴雨」(「日米時報」大正8年7月12日、第939号、9面)

「鉛刀一割」(「日米時報」大正8年7月19日、第940号、1面)

\*署名・王郎劍

「鉛刀一割」(「日米時報」大正8年7月26日、第941号、1面)

\*署名・王郎劍

「鉛刀一割」(「日米時報」大正8年8月2日、第942号、1面)

\*署名・王郎劍

「政治家では無いが井上公二氏の大気炎―山東省及び支那問題―」(「日米時報」大正8年8月2日、第942号、4面) \*署名・王郎劍

王郎劍

「鉛刀一割」(「日米時報」大正8年8月9日、第943号、1面)

\*署名・王郎劍

「鉛刀一割」(「日米時報」大正8年8月16日、第944号、1面)

\*署名・王郎劍

「はどそん河―『紐育風土記』―」(「日米時報」大正8年8月16日、第944号、9面)

「鉛刀一割」(「日米時報」大正8年8月23日、第945号、1面)

\*署名・王郎劍

「鉛刀一割」(「日米時報」大正8年8月30日、第946号、1面)

\*署名・王郎劍

「鉛刀一割」(「日米時報」大正8年9月6日、第947号、1面)

\*署名・王郎劍

「植民地の愛国心―深甫及び森次郎氏の与ふ―」(「日米時報」大正8年9月6日、第947号、4面)

\*署名・広一郎

「共存の人々」(「日米時報」大正8年9月6日、第947号、1面)

\*署名・広一郎

「鉛刀一割」(「日米時報」大正8年9月13日、第948号、1面)

\*署名・王郎劍

「空中征服(一)〜(九)」(「日米時報」大正8年9月13日〜11月22日、第948〜958号) \*署名・王郎劍

「鉛刀一割」(「日米時報」大正8年9月20日、第949号、1面)

\*署名・王郎劍

「舟遊会見参記」(「日米時報」大正8年9月20日、第949号、6面)

\*署名・広一郎

「鉛刀一割」(「日米時報」大正8年9月27日、第950号、1面)

\*署名・王郎劍

「再び後藤男の微笑み―渡歐視察談―」(「日米時報」大正8年9月27日、第950号、7面) \*署名・王郎劍

\*署名・王郎劍

「鉛刀一割」(「日米時報」大正8年10月4日、第951号、1面)

\*署名・王郎劍

「鉛刀一割」(「日米時報」大正8年10月11日、第952号、1面)

\*署名・王郎劍

「大僧正マーセイを歓迎して」(「日米時報」大正8年10月11日、第952号、5面) \*署名・王郎劍

\*署名・王郎劍

「五十九丁目展覧会」(「日米時報」大正8年10月11日、第952号、5面) \*署名・(広)

\*署名・(広)

「鉛刀一割」(「日米時報」大正8年10月18日、第953号、1面)

\*署名・王郎劍

「鉛刀一割」(「日米時報」大正8年10月25日、第954号、1面)

\*署名・王郎劍

「食卓へ兎電―牛鍋に鼎座して尾崎田川の二氏寺内伯の氏を聞く―」(「日米時報」大正8年10月25日、第954号、5面) \*署名・王郎劍

\*署名・王郎劍

「鉛刀一割」(「日米時報」大正8年11月1日、第955号、1面)

\*署名・王郎劍

「鉛刀一割」(「日米時報」大正8年11月15日、第957号、1面)

\*署名・王郎劍

「浪人を送るの書―宇野暁原詞兄へ―」(「日米時報」大正8年11月22日、第958号、1面) \*署名・王郎劍

\*署名・王郎劍

「鉛刀一割」(「日米時報」大正8年11月29日、第959号、1面)

\*署名・王郎劍

\*署名・王郎剣

「予告」(「日米時報」大正8年11月29日、第959号、8面)

「鉛刀一割」(「日米時報」大正8年12月6日、第960号、1面)

\*署名・王郎剣

「鉛刀一割」(「日米時報」大正8年12月13日、第961号、1面)

\*署名・王郎剣

「英国大会議—発議—」(「日米時報」大正9年1月1日、第963号、3面) \*署名・王郎剣

号、3面) \*署名・王郎剣

「時報社七人伝」(「日米時報」大正9年1月1日、第963号、10面) \*署名・王郎剣

面) \*署名・王郎剣

「川口先生」(「日米時報」大正9年1月1日、第963号、18面)

\*小説

「自ら己を送る書—人格の小人森丈輔氏に呈す—」(「日米時報」大正9年1月1日、第963号、23面)

なお、中田幸子は『前田河広一郎における「アメリカ」』で、前田河広一郎によって「続き読物『幸吉の手紙』」が書かれたということが、「日米時報」に「幸吉の手紙」という作品は掲載されていない。多分これは「幸吉の手帳」の誤りであろう。「幸吉の手帳」は大正八年六月七日から七月二十六日まで六回「日米時報」に掲載されたが、「幸吉」は前田河広一郎の筆名ではない。詩人の大野幸吉であ

る。大野幸吉は、「日米時報」に、この「幸吉の手帳」のほか、詩「機械」(大正8年1月25日)や「弱虫」(大正8年7月19日)等を執筆している。

王郎剣の匿名で書かれた「動中静観」「一刀両断」「鉛刀一割」というのは、「日米週報」「日米時報」の第一面の最下段に掲載されているコラム名である。「朝日新聞」の「天声人語」、あるいは「毎日新聞」の「余録」といったようなものに相当する。前田河広一郎が「三等船客」で文壇に登場する以前に、アメリカで編集長として「日米時報」で活躍していた時に、どのような内容のコラムを書いていたのか。前田河広一郎が「日米時報」に載せた文章を復刻すべきであるが、その紙幅の余裕がないので、コラム「動中静観」「一刀両断」「鉛刀一割」がどのようなものであったか、その見本に一篇だけ、「日米週報」大正七年十二月二十一日に掲載された「動中静観」を次にあげておく。

## 動中静観

王郎剣

□正義人道自由、どれ どれ 立派な言葉ではないか。これらの三位を一体にした国では到底、東洋人種排斥問題だなんと云



ふ破天荒な罪悪はあるべき筈はないのに。

□廿世紀の米國議院で やつぱり誰に頼まれるのかしら或る議員などは切りに此の非人道問題を振り廻はすに至っては大概の泰西崇拜者流の熱を奪ひ去るに違ひない。

□手紙一通で委細御依頼申上候とやれば義に富むだ米國だけのことと思つて世界の各小國からウイルソンへ歎願書を出すのは滑稽である。最近に大岡様の門を叩いたのは印度と伊太利とである。

□トルコがアルメニヤ人を虐殺してをる事はどの國にも知れてゐるが、アルメニヤと云ふ人種 よく／＼トルコ人に殺されることが好きと見える。

□勝てば官軍負ければ賊とは云へ、何んで 彼の仕事を真つ黒に塗り立てゝ仕舞ふのは支那人でさへやらぬ事である。

□米國內の産業が戦時状態から平時の状態に復るまでその經濟界は自然活動を減ずる。それが不景氣を招き失業者を出す様になる。

□斬る事情の下に労働問題を調節して社会組織の定全を保つことは仲々容易であるまい。労働組合が戦時中得た非常の貨銀を戦後に 継続させる決心をなし加ふるに或一部にボルシエフイズムの思潮が労働者の間に拡がりつゝある。

□斯かる紛糾錯綜せんとする労働問題を如何に調節せんとする

か、マ州選出議員某が提出せんとする移民入國停止案が之を解決するだらうか。

□ボルシエフイズムを憎む米國に、國民の大多数が排日問題と云ふ非人道事を公々然と議院の中央で陳べて居るのはボルシエヴィキ以上の罪惡□□□□□□。(注、□印は原紙が破損していて判読不可の箇所)

前田河広一郎は、「▲人種と云ふ觀念は群集心理の最も原來的な感情を智的に發表した群に過ぎない」(鉛刀一割)大正8年3月8日)という。これらのコラムで最も関心を示したのは、人種的差別問題や平和會議などであった。コラムはアメリカ社会における時事的な事柄だけに言及してゐるのではない。前田河広一郎は日本社会における出来事をも話題に取りあげる。例えば、「動中静観」大正八年一月二十五日に「▲日本の法廷にユーモアが輸入されたのも最近の事実だ。女優月岡静枝と弟との放火犯件に塚崎弁護士はこんな事件が有罪になつたら被告と共に剃髪すると言ふと、検事は本件が無罪であつたら、坊主以上になつて見せる」と真面目な論駁。社会から迫害された『笑』は飛んでもない処へまぎれ込んだものだ」と書き、大正八年二月一日には「▲博士吉野作造浪人會を突破して有毒なる旧思想撲滅大會を公開す。紐育にも支部を置いて良からう。勿論不賛成は覺悟の前だ」と述べてゐる。日本からの新聞や雑誌に目配り

していたのであろう。新聞社はそれらの情報が集まるところでもあった。

## 三

動きをかなり把握することが出来たのではないかと思われる。

芸術家の島村抱月がスペイン風邪で急死した。新劇俳優の松井須磨子が抱月の二カ月の命日、すなわち大正八年一月五日にあと追いつ自殺をした。その十三日後に、前田河広一郎は須磨子の追悼文「烈火―須磨子の死―」を「日米時報」大正八年一月十八日に執筆している。前田河広一郎は「羨ましい程の恋では無いか。崇敬な悲劇では無いか。女性のやさしさの絶頂に燃えた情熱の烈火では無いか。縊死と云ふ悪名さへ猶ほ美はしふする心根よ、愛よ、切な恋よ。死は総ての罪を浄化した。遺言通りに墓は一碑に比翼塚の抱月須磨子と並べてもらひたい」と、須磨子の「最も偉大なる芸術は恋」であったと称賛したのである。この「烈火―須磨子の死―」は、「つい此頃『早稲田文学』の抱月追悼号を見た」という書き出しではじまっている。『早稲田文学』島村抱月追悼号の発行は大正七年十二月一日である。前田河広一郎はアメリカのニューヨークに生活していて、今日のように航空輸送がまだ十分に発達していない大正時代に、それほど時間の隔たりをおかないで、「早稲田文学」の島村抱月追悼号や日本の新聞を見ただうえで、「烈火―須磨子の死―」を書いているのである。前田河広一郎は、日本に帰国する直前の一年間余りを「日米時報」に勤めたことが、日本の文壇の状況や

「日米時報」には「共存」というページがある。詩や短歌など文芸作品を載せている欄である。改題される前の「日米週報」にも「共存」という欄があった。前田河広一郎は「私のやつている新聞の文芸欄には、詩歌のスペースもあったが、たしか照井栄三だったろう、それを『共存』欄として組み込むようになったのは、ずいぶんいろいろの連中がそれには書いたものだ。久家一象、野崎横臥堂、菅野衣川、丘辺香、照井栄三、石垣栄太郎等々のニュー・ヨーク文壇のいわゆる花形であって、なかなか盛んなものであった。」という。

先に、大正六年夏に、前田河広一郎らが雑誌「共存」を出したことを記した。雑誌「共存」の発行所は「四三三リンコン街ブルクリン ニューヨーク州米国」で、前田河広一郎は「編輯主任」になっている。『青春の自画像―遊びは学問なり―』によると、「阿部幹三、植松定雄、山下西舟、久家一象、石垣栄太郎、それから私と、会費を出したのはこの六人で、印刷は九ボがあるというので、桑港の日米社に依頼した。別に編集会議もせず、原稿は集まった範囲でつっこみ、あとは次号まわしとして、ともかく創刊号だけ出して

みた」と記述している。だが「共存」は創刊号だけで終わったようである。この雑誌の「共存」から、「日米週報」の「共存」欄へ移行していったのか、「日米週報」にいつから「共存」欄が設けられたのか、雑誌「共存」が刊行される前からであるのか、それとも後なのか、大正六年の「日米週報」が未調査なので、その点を詳らかにできない。

興味深いのは、「日米時報」大正八年一月十八日発行に、「共存同人第四会合」の案内が、「場所——一力（西六十五丁目）／時間——一月十八日（土）夕六時／会費——二弗／趣味を中心とする会合に候へば何人も御出席被下度御来会の旨両新聞社宛に十六日中に願ひ上げ候」と、「社同人」の名義で載っていることである。「両新聞社宛」というのは、ニューヨークで当時発行されていた日本語新聞二紙、「日米時報」と「紐育新報」である。大正八年一月十八日に催された共存第四回会合の模様については、「日米時報」（大正八年一月二十五日発行）の「同胞」欄に、次のように報じられている。

・共存第四回集會 は去る土曜日一力にて催され画師、音楽者、文芸に興味を持つ人々二十八人集り、各自の芸術苦心談やらデッサンシヨや同じ埒塙に混和した近頃奇抜な会合で年始の下をはねのけた感じに散会したのは夜十二時。次回幹事は堀一郎、飯嶋黙兵衛、佐藤健の三氏と決した

この共存の集會は、ニューヨークに在住する芸術家たちの親睦をかねた懇談会のようなものであったのであろう。大正七年ごろから開催されたと見てよいのであろう。第五回の集會が開かれるのは大正八年四月一日で、場所は料亭「おたふく」である。年四回位の割合で、場所も固定しないで、その都度、次回の幹事を決めて催されていたようだ。「日米時報」大正八年四月五日発行に、「共存社のあつまり」という記事で、第五回集會について次のように記している。

寒い晩だったエプリル フールの夜とあつて桜の季節を自然は人を馬鹿にした様な寒さおまけに冷めたい麦酒を飲み込む四十七士の名宜り揚げ胸震ひは命惜しさからでもなかった。唯遺憾なことには四十七士が十七欠けて卅名しか出席せぬことであつた。一々芳名を列挙するのも地方巡業の壮士芝居の様だから代表的人物を録すると、高木、堀、伊藤、石垣、浜地、加藤、山田、久家、野崎、萩生田等の鉄中錚々の文士芸術家音楽家其他同好の士平民芸術と芸術平民との特色を十二分に發揮した愉快な会合誰やらの自個紹介に「鎗鎗」は振つてゐた。次回幹事は吉田菅天、森次郎、光星ドクター、□□□□四氏

前田河広一郎らの雑誌「共存」から派生して、共存社の集まりが企画されたのか、それとも雑誌「共存」とは全く無関係になされたのか、その間の詳しい経緯がわからない。第五回あつまりの「代表

的人物」として名前が挙っている石垣、久家は、雑誌「共存」同人の石垣栄太郎、久家一象である。雑誌「共存」の同人たちや「日米時報」や「紐育新報」の人々が共存社の会合に深くかかわっていたのであろう。共存社に集まった人々が「日米時報」や「紐育新報」に詩歌など文芸作品を載せ、ニューヨークの日本人の文壇を形成していったのである。

大正八年四月ごろから、この共存社の集会を倶楽部あるいは法人団体にしようという動きが出てくる。横臥堂が「共存倶楽部創立の議」（「日米新報」大正八年四月十九日）を、シーエム生が「共存社に対する希望」（「日米時報」大正八年五月三日）を書いていいる。横臥堂は「芸術家は自主々義者である、同時に汎人主義者である。自主々義者なるが故に彼等の世界には君主がない。汎人なるが故に彼等に困境がない。彼等は自我に忠なるも敢て他人を侵す事を好まぬ。彼等は孤独に生き得る自負あると共に共存に生き得るの雅量がある、共存クラブ存立の所以である」という。各人に月々五千仙という会費を募るのでなく、一万弗位の基本金を募り、経済的独立した団体であらねばならない。倶楽部は生産的存在として、舞踏会や美術展覧会など儲かる仕事をせねばならないと提案するのである。前田河広一郎は横臥堂やシーエム生等の倶楽部組織結成への動きに対して反対であった。前田河広一郎は「共存結社の可否」（「日米時報」

大正八年五月十日）で、次のように主張した。長い引用になるが前田河広一郎の共存社に対する態度が窺えるので全文をあげておく。

どんな風のめぐりか近ごろ共存社を組織立つたアカデミックなものにするといふ御意見が方々から舞ひ込んで来てゐるやうですが私にはその真義が解り悪いのです。共存といふ所謂の紐育の銀行員や会社員等から『ころつきの集り』とか『情落書生の集会』だなんて批評を貰ふ会合は文芸の上の意味から同好の士が組み立てた紙細工の様なもので別にこれを一法人団体としてたり倶楽部組織としたりすることは創立の連中の望まない。又同好の人々も期待せぬことぢやないかと思ひます。やはり、ころつきの集り情落書生の集合でいゝぢやありませんか。文芸が直接に靴の値段や瓦斯の問題に触れてないからといって実社会に居候分の対遇を受けて居る以上は決して文芸其のものゝ価値の可否でなくてその批評家がどうかしてゐるんで彼等の低能さ加減を披瀝するに外ならぬのです。こんな社会<sup>ソサエティ</sup>で無理に株式にするとか会社組織にするとか云ひ初めたら囚はれ初める原因です。型にはまつた日本の旧劇が慣例月並のしびるをやるやうな運動の底には果して何がありません。出来得るだけ公開して風通しを良くし偏狭な党派心や主義や何かに捕はれず御困ひ文芸とならぬ為めの修練場を共存といへばよいと思ひます。温室

の花は自由自在に冬でも咲きませうが野原の花は春か夏でなければ咲きません。それが自然です。自然を措きスポンタニエテイを放抛して我々はどこに生命を求めませう。私は有りのまゝの方を賛成します。

結局、共存社は倶楽部や法人団体にしようという動きがあったが、それは実現しなかった。前田河広一郎の主張通り、「画師、音楽者、文芸に興味を持つ」同好の人々が参集する会合として、これまで通り運営されていった。前田河広一郎が日本に帰国する際に、共存社は送別会を催している。「日米時報」大正九年一月一日発行に、その会合の彙報記事と「共存社告」が掲載されている。参考までに彙報記事と「共存社告」をあげておく。

○共存会合 来る五日夕七時から料亭都で新年宴会を兼ねて今回帰朝される当社の前田河広一郎氏の送別会を開き一般氏が行を送らんとする。人々の多数来会を望むと因に会費は二弗で参会希望者は四日迄に当社又は新報社へ知らせしてくれるやうにとのこと

また、「共存社告」には、次のようにある。

## 共存社告

此度吾々は

前田河広一郎氏送別に

新年宴会を

兼ねて集りを開き普ねく諸君の参会を希望します。さうして其

のきめは次の様に為ました。

一時は来る五日の夕七時

一 処は都亭（五十八丁目）

一 会費は金二弗当日持参

一 締切は四日として参会の有無を当社又は紐育新報社へ通告

すること

幹事

## 同人諸君

追て今回は一々諸君に通告状を發せず此の広告を以て其れに代ふ

## 四

大正八年十月二十九日から十一月二十九日まで、ワシントンで第一回国際労働會議が開催された。日本政府は、この會議に労働者代

表を内務大臣床次竹次郎の知人である榎本卯平を派遣した。友愛会をはじめとして信友会、鉱山労働同盟会などの労働組合から、榎本卯平は労働者組合の代表でないという反対意見が噴出した。そのことがアメリカにも伝わり、十一月六日に開かれた本会議において、ゴム・パーズ労働代表が榎本卯平の資格が講和条約第三百八十九条の規定に反するのではないかと抗議したのである。「大阪朝日新聞」大正八年十一月十七日発行は「日本代表沈黙―片山氏突然現はる―六日の労働会議」という見出しで、その際「紐育にある日本社会主義者片山氏は議場に姿を現したるが彼等は在米日本社会主義者の田口と連名にて日本官憲が常に日本に於ける社会運動及労働運動に強圧的手段を執り又労働者が非常なる悲惨の状態にあること榎本氏の無資格を述べたる英文の印刷物を会場入口にて配布せり彼等は更に各種の示威運動を行ふべき計画の由」と報じた。この時の「英文の印刷物」に、片山潜らは「在米日本社会主義団」という名称をはじめめてもちいた。ニューヨークで活動していた片山潜のもとに、田口運藏、渡辺春男、間庭末吉、河本弘夫、猪俣津南雄ら青年が集まり、大正七年の秋ごろから研究会がつくられ、それが大正八年十一月には「在日日本社会主義団」という組織にまで発展していったのである。

前田河広一郎は、片山潜とのつながりについて、「俺の三十六年」

（「文章倶楽部」大正12年2月1日）で、「同じ職業に片山潜氏と俺とを結びつけた、妙な縁で。氏は毎号新聞へボルシエウイキに関する論文を匿名で寄せてくれた。俺が第三期の思想革命に出会はずのは、実に氏に負ふところが多い。近藤栄三、田口運三などと会つたのもこの頃だ。あまり過激になりさうだと、社長が俺に注意した」と述べている。この「毎号新聞へボルシエウイキに関する論文を匿名で寄せてくれた」という片山潜の論文は、「日米時報」大正八年八月十六日から十二月十三日まで十八回にわたって連載された「露国近代革命史」である。片山潜の「露国近代革命史」は無署名で掲載され、多分、前田河広一郎が書いたのであろう第一回の冒頭部分に「記者曰 本論文は廿世紀の政治外交経済等に最も通曉せる一学者が本紙の為に遙かに日本から寄せられたもので要求により其名を出さぬ。なほ筆者は他日此文を一冊子として上梓されるかも知れぬから転載はお断りする」という断り書きが付されている。

前田河広一郎は、大正九年一月一日発行の「日米時報」二十年記念号にも「片山潜氏には、ベラ・クーンの末路を書いて貰った。例によって、相当露骨な革命万才主義は遠慮して貰って、一応革命の筋を通し、その悲劇の経路をはっきりさせることで満足していただいた」（『青春の自画像―遊びは学問なり―』）というので、「日米時報」二十年記念号に掲載されている岸本篤次「革命研究―ベラクーンの末

路」は、片山潜の著作である。岸本篤次は片山潜の匿名なのであった。前田河広一郎の著作だけでなく、「日米時報」に発表された片山潜の著作もまだ紹介されたことがない。「日米時報」は片山潜研究においても重要な新聞であるといえよう。

片山潜の「露国近代革命史」の第一回が「日米時報」の大正八年八月十六日に掲載されたのであるから、それ以前には前田河広一郎と片山潜との接触が既にあつたと見なしてよいであろう。前田河広一郎は「日米時報」大正八年十月二十五日に国際労働大会規約を日本語に訳した「国際労働規約条件の全文」を三ページにわたって無署名で掲載している。片山潜らのグループとの交流が前田河広一郎に「労働規約」などの問題に関心を寄せるきっかけを与えたようだ。片山潜らのニューヨークにおける活動がどういふものであつたか、「在米日本人社会主義団」の組織の実態がどういふものであつたのか、詳しいことは判明しない。だが、彼等の働きによってニューヨークに「労働問題研究会」が組織されたと見てよいであろう。「日米時報」に、前田河広一郎も関与した「労働問題研究会」の記事が二つ出ている。ニューヨークにおける片山潜や田口運蔵らの活動の一端を窺えると思うので、その全文を紹介しておく。その一つは「日米時報」大正八年十一月一日発行に掲載された「紐育にて——労働問題研究会」である。「コンフェレンス出席者歓迎——研

究会の設立」という小見出しがついていて、次のようにある。

田口運蔵、人見潤之助、織田寛等諸氏の連日の斡旋によって八時間労働の処を当夜だけは四時間余分に公共問題の爲め犠牲にする覚悟を以て去る廿七日夜紐育日本人会館に集合した廿一名の少壮有志の顔触れに出席順にして人見潤之助、高橋要、家坂良平、前田河広一郎、筒井繁四郎、渡部民三、竹中重雄、織田寛、紀田知太郎、田口運蔵、神子嶋伍郎、近藤延太郎、幡詢、片山潜、下野閣治、角田柳作、柴田兵彌、岡宮義一、大仁要、森次郎、塩川利左衛門、川嶋仙蔵の諸氏でコーラムをなし満場一致で伍長の神子嶋君が当夜の議長に推され莫の煙の中で議事は始められた。簡単に田口君が集会の趣旨を陳べられ議長の穩当な建議案募集の声がかゝると前田河君の時局に鑑みし紐育同胞有志間に労働問題の等閑に附すべからざるを以て近き将来に於て労働協会又は組合の如きを設立するの可能性ありや否やを調査の爲め直に協会又は組合設立に着手する前研究会を起し實際的研究を目的として之を紐育同胞間に設けると洋服細民一流の建議を提出し近藤人見大仁田口等諸君の質問に対して弁する処ありて后可決され遅れ馳せに渡部君の質、義川嶋君の原案疑問等あり同会の設立は議長によりて宣告されるとコロムビヤの近藤君は右附帯事項として右設立の委員附託案を出し甲論乙駁の

后委員としてはワシントンのコンフェレンス出席日本代表者諸氏を歓迎する招待委員と研究会旨趣草案及び次回開会の事務に關する委員を銓衡するに可決し招待委員七名実行委員三名合せて十名を選挙することとし人見案の諧謔『共存同様の会合云々』に同類を解く間に鉛筆と紙が廻され角田君が「私は別で御座んす創立者の一人に入っては居りませんから其おつもりで」と言ふまも無く誰やらのフェルト帽に集つた紙片剥出しの東北弁で読み挙げた田口君左の人々を招待委員の当選者として一段濁音にエンフアサイスを置いた。

神子嶋伍郎 岡宮義一 森次郎 田口運藏 人見潤之助 川嶋仙藏 下野闔治 前田河広一郎

七名が八名になつたのは同点者が二人出来たので二人当選を議長が用意周到の結果である。次の三名の選挙には森次郎君の説明あり二三の質問あり漸く時間の重みが眼眶の筋肉に圧迫して来る頃を簡單々々の声と共に紙と鉛筆とフェルト帽とが再び順廻して田口君の関東以北弁が又々呼び挙げたが左の当選者が草案委員として次回会合迄有力権を持った

人見潤之助 片山潜 前田河広一郎

時計の針が戦争節約時間なら火曜日にもなつてる頃、雨のばらばら土砂降る夜の中へ相散じた。

なお、「日米時報」大正八年十一月十五日発行の「個人と団体」欄の彙報記事に「◎労働問題研究会 起草委員に選挙された三人中片山潜氏は辞任し次点者森次郎氏代はる」とある。なぜ片山潜が起草委員を辞任したのか、思想的な対立であろうか。それとも人間関係のこじれであろうか。なお、森次郎は「日米時報」の営業主任をやっていた。

もう一つの「労働問題研究会」の記事は、「日米時報」大正八年十二月十三日発行に掲載された。次の「●労働問題研究会」である。

過般当市同胞間に建立された此会はワシントン会議参列一行中特殊代表者を歓迎するはずの処都合に依り招待会開催は不可能となつたと下野、森、人見三委員から通知があつた。尚ほ既報の如く堂前、大嶋二氏は紐育有志の歓迎会に臨まれ席上十五名の人々が各々所感を陳ベポリシニヴィズム主張の片山潜氏に反対する森次郎氏の論議や渡辺氏三氏が顧問脱退の正面攻撃や人見氏のツレイドユニオン主張や小森氏の労役実行論神子嶋氏の工場雑話等あり大体に於て頗る青年の意気相投合した研究的な会合でありさしも過激な片山氏の説も衆寡敵せぬ様な傾向が見えたのは注目すべき事であつた

日本近代文学研究において、明治時代からイギリスやアメリカやフランス、あるいは中国など諸外国で刊行された日本語新聞につい



ての調査研究が未開拓のままになっている。今後、この面での研究が進めばよいと思う。

(うらにし かずひこ／本学教授)